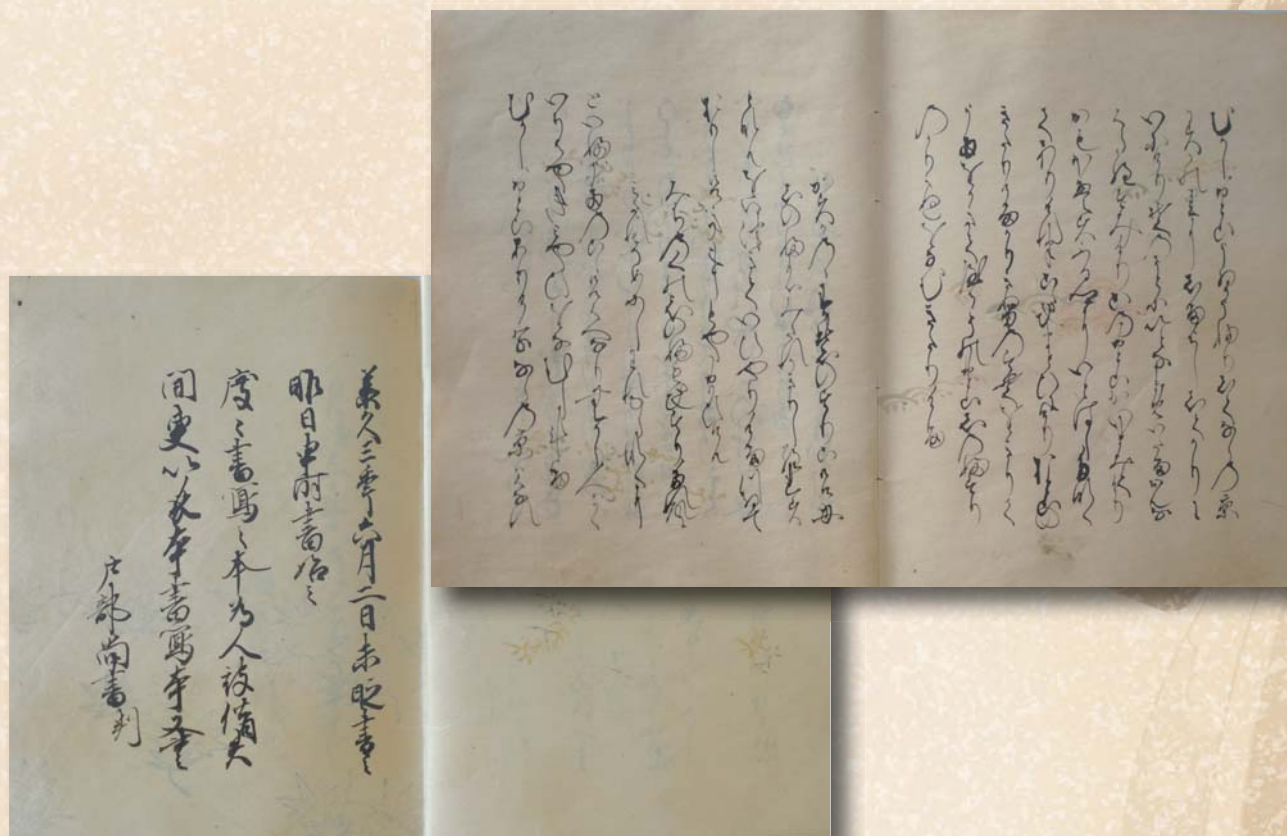


国文研ニュース

No.45 AUTUMN 2016



伊勢物語（承久三年本）

目 次

●メッセージ

人文学の危機と異分野融合研究	河添 房江	1
----------------------	-------	---

●研究ノート

鉄心斎文庫—伊勢物語コレクションの魅力	山本 登朗	2
『唐土訓蒙図彙』への誘い	クリストファー・リーブズ	4
『和訓三体詩』読解の試み	福井 辰彦	6
(付) 特定研究「日本の近世における中国漢詩文の受容」公開研究会の開催報告	神作 研一	7

●トピックス

鉄心斎文庫感謝状贈呈式について	藤島 綾	8
国文学研究資料館公式Twitterがはじまりました	西村慎太郎	8
第28回人文機構シンポジウム「妖怪空間—でそうな場所」	齋藤真麻理	9
パネル展示「アーカイブズ・レスキューの活動記録」のご案内	宮間 純一	10
2016年度 子ども霞が関見学デー	宮間 純一	10
第2回日本語の歴史的典籍国際研究集会		
日本古典籍への挑戦—知の創造に向けて—	入口 敦志	11
第40回国際日本文学研究集会プログラム		12
総合研究大学院大学の近況		14

人文学の危機と異分野融合研究

河添 房江（国文学研究資料館運営委員、東京学芸大学教授）

「自分の研究領域が三十年安泰であると思っただけではない」、院生の頃、理系の研究者であった父から諭された言葉である。けっして喜ばしいことではないが、その言葉の重みは時が経つにつれ増しているように思われる。

国文学の危機は以前から叫ばれていたが、昨年六月に文部科学大臣から国立大学に対して人文社会系などの学部・大学院の廃止・転換を求める通知があった。その影響は多方面に出はじめ、いまや人文学という学問の大枠さえも揺らいている。国文学研究資料館を取り巻く状況も厳しさを増していると想像する一方、こうした時代だからこそ、大学共同利用機関として全国の大学を牽引するような先導的な試みを展開してほしいとの期待もいっそう高まるのである。

この四月に運営委員をお引き受けする前の二年間、文部科学省の国立大学評価委員会分科会の委員として、人間文化研究機構をはじめ、自然科学研究機構、高エネルギー加速器研究機構、情報・システム研究機構の四機構の評価に関わってきた。昨年と一昨年は、文字通りダンボール一箱の四機構十七機関の実績報告書等と格闘しながら、細かな評価シートを埋めていく作業に、夏休みのすべてを捧げることになった。特に理系の機関を評価する際は勝手がわからず、右往左往するばかりだったが、いまにして思えば、そのカルチャーショックから学ぶことも多かった。

今日、四機構に求められているものが、国際交流や国際共同研究、若手研究者の育成、地域への貢献など、従来考えられてきた取り組みにとどまらないことを知ったのも、その成果の一つであった。文理の枠組みを超えた、いわゆる異分野融合研究がトレンドとなり、その比重を増している。異分野連携研究とも呼ばれるが、同じ機構内にとどまらず、別の機構との連携研究が新たな可能性を拓くものとして、徐々に注目されているのである。

これまでの連携研究といえば、東日本大震災以降の「大規模災害と人間文化研究」のプロジェクトに代表されるような、人間文化研究機構に属する諸機関が連携するというものであった。「大規模災害と人間文化研究」では、総合地

球環境学研究所・国立国語研究所が「地域文化・環境と復興・再生の研究」を、国立民族学博物館・国立歴史民俗博物館が「大規模災害とミュージアムの連携、活用の研究」を、国文学研究資料館が「大規模災害と資料保存の研究」を担当するという具合に、五つの機関が参加し連携してきた。

同じく機構内の連携研究として、「異分野融合による総合書物学の構築」もはじまっていると仄聞する。さらに今後は、それぞれの機構を超えた連携研究の取り組みが増えて、評価されるという状況がもたれると思う。

そこで注目したいのが、今年三月に当館で開催された「古典籍からオーロラを見つけよう―「古典」オーロラハンター」なる異分野融合のワークショップである。古代・中世の古典籍・古記録の中から、「赤気」「白気」「赤雲」「白虹」などオーロラに関する記録を一般の参加者に探してもらおうというもので、大変好評であったという。先の「国文研ニュース」でも紹介されたが、同じ建物にある情報・システム研究機構の国立極地研究所と総合研究大学院大学との共同研究によるワークショップである。地の利も活かした形ではあるが、異分野融合であることはもとより、機構を超えて連携した興味ぶかいイベントであり、今後のあり方を先取る意味でも高く評価される。

現在、国文学研究資料館が推進する「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」でも、味の素食の文化センターとのコラボレーションで、江戸時代の料理書約三百点が来年五月にWEB公開されるという。昨年の夏には、江戸期以前のくずし字を高精度でテキストデータ化する新方式OCR技術が、凸版印刷との共同研究として多くのメディアに取り上げられ、話題を集めた。こうした異分野融合研究は今後、国立や民間、海外のさまざまな機関との連携により、いっそう加速していくに違いない。

国文学研究資料館の取り組みが先駆的なモデルとなり、閉塞感ただよう人文学の現況にも活を入れ、新たな知見をもたらす展開を、国立大学の一教員としても期待してやまないものである。

鉄心斎文庫—伊勢物語コレクションの魅力

山本 登朗（国文学研究資料館客員教授、関西大学教授）

千点を超える膨大な鉄心斎文庫の伊勢物語コレクションを収集されたのは、株式会社三和テッキの社長であった芦澤新二氏と、その没後に社長を継がれた美佐子夫人のご夫婦お二人である。

芦澤新二氏は、大正13年（1924）生まれ。山梨県中巨摩郡西野町（現南アルプス市）の旧家の御出身である。昭和19年（1944）、明治大学在学中に海軍に召集され、予備学校教育部を経て、魚雷による特攻部隊に入る予定だったところ変更になって終戦となり、復学された明治大学で学生雑誌『駿台論潮』の編集長として活躍された。その編集メンバーの後輩の一人が、美佐子夫人だった。熱烈な恋愛の結果、新聞記者志望だった芦澤氏は、美佐子夫人のお父様が経営しておられた会社を継ぐことになったのである。

それ以前、体調を崩して転地療養していた後輩の美佐子さんに、芦澤氏は退屈しのぎの読み物として、賀茂真淵が書いた注釈書『伊勢物語古意』の版本を贈られたという。さらにそれ以前、芦澤氏は旧制中学で習った伊勢物語の「東下り」に強く感動され、すぐに文庫本の伊勢物語を買って全文を読まれたともいう。芦澤氏ご夫妻と伊勢物語は早くから、深いところでつながっていた。

実は芦澤氏は、三つの旧制中学に在籍されている。太平洋戦争直前の時期、禁止されていた外国映画を堂々と見るなど、个性的で気骨ある中学生だった芦澤氏は、山梨県の二つの中学校を放校となり、縁あって京都二中の夜間部に編入、そこを卒業した。「京都二中が自分を受け入れてくれなかったら、自分の人生はどうなったかわからない。自分にとって京都は第二の故郷だ」と芦澤氏はしばしば述べておられるが、郷里を離れた中学生生活を余儀なくされた芦澤氏が、伊勢物語の「東下り」に出会って心を打たれ、強く共感されたことも、けっして偶然ではなかったように思われる。

お二人のご結婚は昭和24年（1949）のことだったが、そのころ、東京大学の前の古書店の店頭で、「阿波国文庫」「不忍文庫」の二つの蔵書印が押された伊勢物語の写本七点が、一括して三千円（ほぼ当時の大卒初任給の額）あまりで置かれているのを偶然発見した芦澤氏は、すぐにそれを入手された。芦澤氏は後の御著書『好古拾遺』（三和新聞社・昭和47年）の中で「このときの喜びは今でも忘れられないほどである」と述べておられる。これが、膨大な伊勢物語コレクションの、実質的な始まりだった。

このときの七点が、現在のコレクションのどれに当たるのかについて、かつて『伊勢と源氏 物語本文の受容』（国文学研究資料館編・古典講演シリーズ5、臨川書店・平成12年）で推測したことがある。「阿波国文庫」は、言うまでもなく徳島の大名、蜂須賀家の文庫であり、その中でも「不

忍文庫」の印をあわせ持つものは、江戸時代の国学者、屋代弘賢の旧蔵書である。明治維新後、阿波国文庫のうち約三万点が、徳島県立光慶図書館に収められていた。昭和20年の空襲によって図書館は焼失し、蔵書もすべて失われたが、幸いにも、六百六十冊の貴重書は疎開されていて無事に終戦を迎えた。ところが、昭和天皇の巡幸に備えて展示準備がおこなわれていた天覧前夜に火災が起り、鍵が見つからず扉が開かないうちに、並べられていた貴重書はすべて焼失したという。しかしながら、「阿波国文庫」の印を持つ本は、今でもあちこちの文庫に多く収められている。芦澤氏が出会った七点の伊勢物語も、その一部だったと考えられる。

このように、鉄心斎文庫の伊勢物語コレクションの出発となった七点の背後には、戦後動乱期の社会混乱の影が見え隠れしている。これ以外にも、鉄心斎文庫には「阿波国文庫」印を持つ本が五点含まれているが、それらもまた、同じような厄災をくぐりぬけて鉄心斎文庫にたどり着いたように思われる。

ちなみに、後に収蔵された伊勢物語版本の中には、日本文化を愛したドイツ人の版画家フリッツ・ルンプがベルリンに持ち帰って、嵯峨本伊勢物語をテーマにした1932年刊の先駆的な学位論文『Das Ise Monogatari von 1608 und sein Einfluss auf die Buchillustration des X V I I. Jahrhunderts in Japan』を作成する資料に使った後、第二次世界大戦による混乱時に消息不明となった大量の版本の一部も含まれていて、そこにはルンプが書いたと思われるメモ書きのカードがいまも挟み込まれている（『フリッツ・ルンプと伊勢物語版本』関西大学出版部・平成25年を参照）。

芦澤氏は「中学時代の友達」という文章（『京都府立第二中学校五十周年記念誌』、後に『天愛不息—芦澤新二を偲ぶ—』三和テッキ株式会社・平成2年に収録）の中で、京都二中夜間部時代の「同級生四十余名」のほとんど全員が、ご自分の下宿に来て「議論したり、遊んだり」したことを記され、思い出深い友人の名前を十数人も列挙して、「ぼくの下宿は、誰からともなく『水滸伝』の梁山泊に擬せられ、いつの間にか夜中の英雄豪傑の溜り場になっていた」と書いておられる。鉄心斎文庫にたどりつき、そこに安住の地を得た数多くの伊勢物語の名品たち、たとえば先に述べた「阿波国文庫」旧蔵本たちもまた、世の変転を生き抜いた英雄豪傑として、芦澤氏の梁山泊に暖かく迎えられたのである。

しかしながら、芦澤氏はもはや一人ではなかった。伊勢物語の収集には、最愛の伴侶である美佐子夫人の協力も大きく、鉄心斎文庫は、ご夫婦お二人の文庫として成長していった。伊勢物語は自分たちにとって「子供のようなもの

と思っている」と、芦澤氏は『好古拾遺』に書いておられる。そしてさらに、「これらの蔵書は子供がみな個性があるように、それぞれ特徴をもっている……こうした点を比べるだけでも興味はつきない」とも述べておられる。鉄心斎文庫の伊勢物語の中には、貴重な資料的価値で知られていたり、とりわけ美しい書体や装丁を有するものも含まれているが、そうではなく、比較的ありふれた姿を持つ伊勢物語も、数多く見られる。それらのすべての個性や特徴を、芦澤氏ご夫妻は、我が子を見るように、愛情を込めてご覧になっていたのである。

ちなみに、貴重なコレクションを火災や湿気から守るために、芦澤氏は品川区のご自宅に鉄筋の書庫を建てられた。「鉄心斎文庫」という名は、鉄道の架線部品を製造していた「三和テッキ」の会社名にもかかわらせながら、その鉄筋の書庫にちなんで命名されたものである。

昭和64年(1989)に芦澤氏は64歳の若さで、多くの人に惜しまれながら他界されたが、美佐子夫人は、三和テッキの社長職を継がただけでなく、伊勢物語の収集を、ご主人の意志を継ぐ形でさらに続けられた。そして、平成3年(1991)11月には、小田原市郊外の別宅に「鉄心斎文庫伊勢物語文華館」を開設され、以後、毎年春秋二回の展示会を20回以上にわたって開催、そのたびごとに展示品の解説図録『鉄心斎文庫伊勢物語図録』(第1～20集、および続編)を継続して

刊行された。毎回10日間の展示会期間中、美佐子夫人はほぼ毎日小田原に通われ、数多くの来館者の対応に当たられた。今はなき新二氏の思いを自分が継がなければならないという強い信念が、美佐子夫人を支えていたと思われる。

平成16年(2004)、ご夫婦の長年の情熱の結晶であるコレクションを、そのままの形で長く世に残すために、美佐子夫人は国文学研究資料館への寄贈を決意され、当時の松野陽一館長との間に「覚書」を交わされた。そこには、散逸させないことや「鉄心斎文庫」の名を残すことのほかに、研究者に広く公開するという項目が、美佐子夫人からの要望として加えられている。

そもそも、新二氏も美佐子夫人も、鉄心斎文庫の閲覧を希望する研究者があれば、たがいに伊勢物語を愛する者どうしとして、常に暖かく受け入れられた。我が子とも言うべきコレクションの伊勢物語をもっと知ってほしい、よく調べて本当の価値を見出してほしいというお気持ちと、伊勢物語を愛する人を知己として迎えたいというお気持ち、そこには常にあったように思われる。芦澤ご夫妻の思いに応え、鉄心斎文庫の伊勢物語をどのように読み、どのように生かし、そこにどのような価値を見出すことができるか。コレクションが寄贈されたいま、その課題は、今後資料館で鉄心斎文庫を閲覧・調査するすべての研究者に課せられている。



昭和57年(1982)のご夫妻(『天愛不息—芦澤新二を偲ぶ—』による)

『唐土訓蒙図彙』への誘い

クリストファー・リーブズ（国文学研究資料館助教）

国文学研究資料館に所蔵している『唐土訓蒙図彙』を紹介するにあたり、我々現代人の先入観にかかわる二つの問題点を提供したい。第一に、江戸時代の類書は子供を相手にしたものと思われてきたが、果たしてそうか。第二に、類書に現れる龍や神鳥など我々のいう「想像上の動物」を江戸時代の人はどう意識していたか。虚構と真実の区別をつけていたかどうかという問題である。

『唐土訓蒙図彙』は1719年（享保四年）に出版された和製類書である。和製類書とは日本人の手によって編纂された百科事典のようなものを指すが、現代の百科事典とはかなり異なっている。特に本書の題に見える「図彙」の類では、文字が少なく絵画に比重が置かれ、我々の意識している文字ばかりの百科事典とは到底比べられないものである。図彙類は決して豊富な文字情報を収めていない。そもそも、江戸時代の書店は「類書」や「百科事典」という語を使わなかった。本書を含め十七世紀後半から十八世紀前半にかけて盛んに編集された図彙類を総じて「画尽」と呼んでいた。画尽つまり図彙類は要するに図鑑であり、それぞれの絵に簡易な解説或いはものの名を記すにとどまる。『唐土訓蒙図彙』はそういう意味で類書や百科事典というよりも図鑑と考えた方が妥当であろう。

『唐土訓蒙図彙』の文字解説を施したのは、宇和島藩（現在の愛媛県宇和島市吉田町）の藩主に仕えた御殿医（特任医師）の平住専安（?-1734）であった。当時の医者は儒学と本草学を基にし、漢籍から得た雑多な知識を治療・養生に生かそうとしていた。いわゆる儒医である。漢文に通曉した儒医たちは医学のみならず、文学、歴史、易学、天文、地理などと様々な分野に渡り著述を残している。逆に言えば、当時の知識人はたいてい医学を何らかの形で駆使していた。パトロンに恵まれた学者は別にして、多くの貧乏学者は止むを得ず医学を売り糊口する。現代の作家が生計を立てるためバイトとして記者や学校の先生の仕事をするのときほど変わらない生活様式であろう。専安は1688年から1710年までの二十年余り藩主の援助を受け医学の道を修める一方、漢学全般を勉強し続けていたに違いない。『唐土訓蒙図彙』は専安が御殿医から退任して大阪に移り隠居した時代に入ってから出版されたものであるが故に、パトロンのない暮らしの生計の足しにした著作であろう。当然だが、大阪においてもまた医学の授業をし、それなりの収入はあったはずである。

『唐土訓蒙図彙』における専安の解説や同定（唐土の動植物などの和名をつけること）より魅力的な所である絵画は、大阪で活躍していた有名な浮世絵師橋守国（1679-1748）の手によったものである。江戸時代の絵師は知識人に属し、儒医と交わり共著を数多く著している。本書がその好例である。

それでは第一の問題点として専安はいかなる読者層を想定していたのかを考えてみたい。専安の序に、「（絵画に付した）文字は漢字で記し、和語の訓をつけたので、童蒙（初学生徒）に文字や物の名を教えるのに最適だ。それに図も多く加えたので、いっそう楽しく勉強できるだろう」とあり、本書の用途と読者層を述べているように見える。多くの学者は「童蒙」のことを子供だと説くが、必ずしもそうではない。年齢を問わず学問に熱心で漢語や和語をもっと詳しく知りたい読者を広く指しているのであろう。今の本屋さんを訪れると図鑑類は子供の読物の棚に置いてあり、江戸時代の図彙類も子供のための読物だと我々は勝手に想定する。『唐土訓蒙図彙』の内容を見る限り、確かに入門的な所も少なくないが、それをはるかに超えている叙述もある。文体だけをとっても、序・凡例ともに仮名の混じっていない漢文で書かれ、諸画に付してある記事の文体も統一されておらず、分かり易い部分があれば理解に窮する箇所も散見する。一般の図彙や類書に「童蒙のため」とか「諸君の利益のため」などと書いてある序文は甚だ多く、売り上げを最大限に上げるのに用いる常套文句である。現代の「好評発売中」と同じく、素直に信じてはいけない。本書の用途や読者はいろいろと考えられ、簡単に「童蒙のため」とは片付けられないのである。

本書のひとつの用途として凡例に、「漢字の訓読みに関しては昔より間違った訓が通用されてきた。たとえば「杜若」をカキツバタと、或いは「黄鳥」をウグイスと訓むのがその例である。本書ではそれぞれの間違った訓読みを正す」と述べている。（カキツバタもウグイスも「加幾津波多」、「宇久比須」と万葉仮名で記され、子供向けにはむしろ不案内であろう。）漢語に正しい和名を当てはめるという作業は同定の問題で、本草学における重大な課題の一つである。中国舶来の薬学書に見える動植物の漢名が分かっている、それは日本の何物にあたるかをはっきり分からなければ、自信をもって薬物の調合はできかねる。同定の作業は動物にまで及ぶ。巻十三は禽獣を収めているが、その中の黄鳥の項目を見ると、「黄鳥はウグイスと日本で訓んできたが、それは誤りである」と専安は言うものの、なぜか肝心の正しい和名は教えてくれない。もう一つの例を挙げると、巻十四は魚介と虫を収めている巻で、そこに鮪魚の項目を設けている（図①）。最後に「鮪をタコと訓むのは間違っている」と指摘するが、そのかわりに正しい和名を教えてはくれない。図に見えるのは明らかにヤガラ（矢柄）であり、日本産のアカヤガラとアオヤガラが知られている。大方の漢和辞典で鮪の字を調べるとタコ以外の意味に、「馬の鞭に似ていて、尾が二つに分かれている」（専安も同じく「形は馬鞭に似たり。尾は岐有」と記し、なぜかその和名を教



図① 鮫魚（『唐土訓蒙図彙』巻十四より）

えてくれない。現代の辞典類においても同定の作業は中途半端で終わっていると言ってよいかも知れない。

図彙類（図鑑）だからこそ、絵画が文字の働きを担っている。凡例に「本書に図だけあって何の説明も付していないものもある」と述べ、「これは長い記事を厭う読者の負担を減らすための工夫であり、文字による説明を略して図だけを挙げる」ということである。巻四の前半に設けられている「仏神仙類」の部立の諸神仏は漢名とその音読みのみが記され、説明は一切ない。同じく巻四の後半に見える「万国人物」の部立は国名（漢名）と音読みしか記されていない。絵だけで十分であるらしい。鮫魚の項目には正しい和名が記されなくても、やはり絵をもって同定の作業を補っている。絵を見ればどういうものかが分かる。分かり易い絵は子供のものの、文字こそ真面目な学者のものだという先入観のせいから、図彙類は子供の読物だという見解の生じる一因でもあろう。

続いて第二の問題点つまり『唐土訓蒙図彙』の内容における虚構と真実の区別について考えよう。巻十三の巻頭を飾る禽類として「鸞鷟」（正しくはガクサクだが、専安はガクソクと振り仮名を付す）という鳥が描かれている（図②）。「これは神奇な鳥だ。鳳凰に似ていて身体や翼は紫色が多い。『国語』（春秋時代の国々の歴史を記す史書）に言わせれば、周朝を建てた時に岐山（陝西省鳳翔県の北東にある）に現れ鳴いたものだ」と専安は説明している。現代の事典類でこの鳥について調べると、たいていは「想像上の鳥」と述べ、実存していないものとする。なお、虚構と真実との境を明瞭に定めようとするのは我々現代人の知癖とでも言えよう。言語史の大家である杉本つとむ氏は、1998年十一月に刊行された「江戸時代西洋百科事典『厚生新編』を

読む」（『学鐙』第九十五巻第十一号所収）と題する論文の冒頭に、次の文を自信満々に高唱する。「作家は虚をもつてなりわいとし、学者は真理を求めるをもって使命とする。しかし現今の社会事象をみれば、マスメディアの高度な発達とあいまって、学者が作家に手をかけて虚を増幅しているのではないかと危惧をいだく」。虚構は嘘に等しく社会の害に繋がり（でなければ危惧をいだく必要はない）、真理は社会の改善に貢献すると、明瞭に虚構と真実の両世界を分けその優劣に固執する。

さて、専安はこの問題に関してどう考えていたのか。禽の部の直後に専安の日記のような文章が挿まれている。ある日、専安の家に訪れた客が『唐土訓蒙図彙』の草稿を読み、「大鵬は『莊子』にも主圻（1530-1615）の『三才図会』にも細かい記事が見えるのに、なぜ貴方は載せていないのか」と編集者の意図を探る。専安はむっとして答えて言うには、

お前はなぜそんなにしつこく大鵬の事を聞くんだろう。鸞鷟こそ鳥類のもっともすぐれたもので、聖代に現れ岐山に鳴いたんだよ。人間でいえば聖みtainな存在だ。あの大鵬だって鳥類の怪しい物にすぎず[中略]人間に例えたら老子や荘子のような狂人だよ。ああいう話は嘘ばかり。僕がそんなものを載せるはずがない。

専安は虚構や真実という単語は使っていないけれども、図彙に載せるべきものと載せるべきでないものをしっかりと区別しているのである。目に見える動物として実際に存在するか否かという現代人がもつ区別の仕方とは異なり、儒教の伝統的な世界観に相応しいものかどうか、聖人に似通うところがあるかないか、という道徳的な基準をもって、虚構（狂人の妄言）と真実（聖人の教え）を分けているらしい。我々の言う「想像上の動物」にしても、啓蒙に値するものならばそれは忽ちに「真理」になりうるのである。



図② 鸞鷟（『唐土訓蒙図彙』巻十三より）

『和訓三体詩』 読解の試み

福井 辰彦（上智大学准教授）

中世以降、近代に至るまで、『三体詩』は幅広く、様々な形で受容されてきた。その中でも特異で興味深い例の一つに『和訓三体詩』（正徳5年〈1715〉刊）がある。同書は、芭蕉の高弟・森川許六の著。『三体詩』所収の絶句に対する注解と、「詩意」と称する和訳からなる。この「詩意」は単なる訳文ではなく、俳文風の翻案と称すべきもので、漢詩の世界を巧みに日本化・俗化し、許六の経験や所懐が表出されたものも少なくない。先行研究には、村上哲見「許六『和訓三体詩』をめぐって」（和漢比較文学叢書16『俳諧と漢文学』、汲古書院、1994）、藤井美保子「森川許六『和訓三体詩』―「序」と「詩意」―」（『成蹊国文』48、2015）があり、やはりこの「詩意」に注目している。しかし、そもそも許六は『三体詩』所収詩を何に基づきどのように理解していたのか、そこからどのような意図・方法によって「詩意」を創作したのか、といった問題については十分な検討がなされていないようである。改めて『和訓三体詩』を注釈的に精読してみる必要があるだろう。

いま、その試みの一例として、張籍「逢賈島」詩を取り上げよう。

張籍「逢賈島（賈島に逢ふ）」

僧房逢著欵冬花、出寺吟行日已斜。十二街中春雪遍、馬蹄今去入誰家。

（僧房に逢著す欵冬花、寺を出でて吟行すれば日已に斜めなり。十二街中春雪遍し、馬蹄今去つて誰が家にか入らん。）

この詩に対する「詩意」は次の通りである。

鳥の声も霞の中に春めき、無名の草漸萌出ころ、垣根廻りの露の臺。下駄の齒につく小田の土、門を出れば推敲の二字を論じ、塘にのほつては、芳草の夢を感じ。東西の輕口、日已に斜なるころ、伊吹をさそふ北風、柳の糸をかき乱し、まだ初春の、空さだめなきに、まくし立たるだびら雪、京橋、土橋、追手先、遍く白妙とは成にけり。鞋跡馬蹄覚束なく、宮も藁屋もみなさしこめて、誰が家にか穴まどひせんと、底にたはぶれたるころあり。

漢詩の世界を日本風に変換するために、地名・人名等を置き換えることは「詩意」が頻繁に用いる手法である。「伊吹をさそふ北風」「京橋、土橋、追手先」といった語句から見ると、ここでも舞台を許六の故郷・彦根の城下町に設定しているのであろうか。

「鳥の声も霞の中に春めき、無名の草漸萌出ころ」は、『徒然草』十九段「もののあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心もうきたつ



『和訓三体詩』（国立国会図書館蔵）

ものは、春の気色にこそあめれ。鳥の声などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、塙根の草萌えいづるころより、やや春ふかく、霞みわたりて、花もやうやう気色だつほどこそあれ」とあるのを踏まえる。「下駄の齒につく小田の土」は、凡兆の句に「鶯や下駄の齒につく小田の土」（『猿蓑』）と見えた。「推敲の二字」が賈島にまつわる故事（『唐詩紀事』等）に拠ることは言うまでもない。「塘にのほつては、芳草の夢を感じ」は、謝靈運が族弟である謝惠連を夢に見て「池塘生春草」の佳句を得たという故事（『蒙求』『靈運曲笠』）に基づく。このように和漢・雅俗を取り混ぜて、多くの典拠を用いることも「詩意」の特徴である。そこに作者・許六の工夫がある以上、我々もそれらを一つ一つ見落とすことなく読み取ってゆかねばなるまい。

詩の第四句「馬蹄今去入誰家」は、「誰が家にか穴まどひせんと、底にたはぶれたるころあり」と訳されている。第三、四句に対する注解には「遍は春雪を云。降つもりたるを云にはあらず。一遍に白妙になりて、家を取違へらるなどいふ心也」とある。つまり、春の雪が舞って視界が一面真っ白になっているから家を間違えなさるな、と「たはぶれたる」ものと解したわけである。しかし、許六が底本に用いた『増注三体詩』の天隠注は、この詩は『楚辞』に倣った張衡「四愁詩」の体を用いたものであり、「欵冬華の寒寂に耐ふるを以て鳥に比し、春雪を以て小人に比し、日斜めなるを以て時の昏きに比す。而して己と鳥と未だ託する所を知らざるを傷むなり」（原漢文）と説く。小人が跋扈する暗い時世を諷する含意を読み取り、自分たちの不遇を嘆く詩と解するのである。近世日本で出版された『三体詩』の注釈書も、おおむね同様の解釈を示す。例えば素隠抄には、

「サテ如是春雪アマネクシテ、春寒ニタヘガタキラリフシ、殊更日暮ノコロニ、独り瘦馬ニウチノツテ、十二街ノ家ヲタツネテ行タマフゾヤ。今ノウキ世ニ、ソノ方ナドヘ、目ヲカクベキ人ハヨモアラジト云フ意、イワズシテ見ヘタゾ」とあり、「欸冬花」「日斜」「春雪遍」の含意についても天隱の解釈を踏襲する。これら諸注釈に見られる、唐王朝の頽廢を底に詠みつつ、賈島（と詩人自身）の不遇を嘆いた詩とする、いささか重い読み方に対して、「詩意」の解釈は滑稽洒脱と評し得る。ここで許六は、あえて一般的な解釈を離れ、独自の読解による俳諧的な世界を創出したのである。

以上のように『和訓三体詩』は、言葉一つ一つを吟味しつつ味読することによって、さらに面白く読める書物であるように思われる。



『三体詩素隠抄』（国立国会図書館蔵）

（付）特定研究「日本の近世における中国漢詩文の受容—三体詩・古文真宝の出版を中心に—」 公開研究会の開催報告

去る2016年8月31日（水）の午後に、国文学研究資料館において、標記の公開研究会を開催した。代表は高橋智慶（慶應義塾大学附属研究所道文庫教授）。参加者は29名。上記の福井辰彦稿はその際の研究発表に基づくものである。プログラムは以下の通り。

◇挨拶 今西祐一郎館長

◇趣旨説明 神作研一

◇研究発表

(1) 合山林太郎（慶應義塾大学）「毛利貞斎『古文真宝後集合解評林』について」

*ディスカサント 染谷智幸（茨城キリスト教大学）

(2) 福井辰彦（上智大学）「『和訓三体詩』読解の試み」

*ディスカサント 金田房子（清泉女子大学人文科学研究
所・客員所員）

(3) 伊藤善隆（立正大学）「近世前期詩作法書寸見」

*ディスカサント 青山英正（明星大学）

◇講演

(1) 大庭卓也（久留米大学）「和刻本『唐詩選』に関する諸問題」

(2) 堀川貴司（慶應義塾大学）「三体詩の版本について」

いずれの発表また講演もフロアを巻き込んで熱のこもった議論が展開され、参加者は皆それぞれに『三体詩』『古文真宝』の持つ奥行きを改めて確認する機会となった。研究成果は勉強出版より別途公刊される予定である。

（国文学研究資料館教授 神作 研一）



公開研究会 集合写真（2016年8月31日／於国文研）

鉄心斎文庫感謝状贈呈式について

平成28年5月26日（木）、国文学研究資料館において鉄心斎文庫感謝状贈呈式を執り行いました。本年3月に伊勢物語資料一千余点を御寄贈くださった鉄心斎文庫伊勢物語文華館館長芦澤美佐子氏へ深甚の謝意を表し、国文学研究資料館館長今西祐一郎より感謝状を贈呈したものです。式にあたっては、芦澤美佐子氏とご家族、また当館元館長松野陽一氏、関西大学教授（当館客員教授）山本登朗氏、当館名誉教授鈴木淳氏などの芦澤氏と親交の深い方々にも来臨を賜りました。

式の終了後、芦澤氏は特設展示「伊勢物語そろいぶみ—鉄心斎文庫コレクション—」を観覧されました。この展示は、今回の御寄贈を記念し、鎌倉時代の伊勢物語写本など資料十二点を公開したものです（当館一階展示室：4月14日—6月4日）。芦澤氏は、夫君故新二氏と半世紀にわたって蒐集された資料を感慨深く御覧になるとともに、画像を用いたデジタル展示にも関心を寄せていらっしゃいました。

また、この日は報道各社による取材が行われ、「朝日新聞」「読売新聞」「えくてびあん」時事通信社 Web サイトに記事が掲載されました（5月25日、5月27日、7月号、6月29日）。その後もケーブルテレビの取材放映が行われるなど（J-COM デイリーニュース・6月1日）、世界最大級の伊勢物語コレクション寄贈に対する社会的関心の高さをうかがわせるものとなりました。

鉄心斎文庫から受け継いだこれらの貴重な伊勢物語資料について、当館では基幹研究「鉄心斎文庫伊勢物語資料の基礎的研究」を発足させるとともに、今後さまざまな形で公開していく予定です。（藤島 綾）



国文学研究資料館公式 Twitter がはじまりました

2016年6月27日より当館の公式 Twitter (@nijlkokubunken) がはじまりました。Twitterとは、アメリカの Twitter 社が運営する情報サービスのひとつで、140文字以内の短文の投稿を利用者で共有するという SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）のひとつです。世界で3億2000万人が活用しており（THE HUFFINGTON POST「Twitterが国内ユーザー数を初公表「増加率は世界一」」。http://www.huffingtonpost.jp/2016/02/18/twitter-japan_n_9260630.html。2016年8月15日閲覧）、SNSでは世界第2位の利用者数です。官公庁や自治体、政財界や芸能人をはじめとして、国内3500万人が Twitter を利用しています。

当館では、これまで以上に多くの皆さまに活動をご理解・ご利用頂きたいと考え、公式 Twitter を開設致しました。公式 Twitter では、当館のイベント・研究会・研究調査活動・刊行物案内・閲覧室と展示室の開館情報などを提供しております。当館における様々な情報をいち早く利用者に届けたいと思いますので、当館の公式ホームページ (<http://www.nijl.ac.jp/>) の利用とあわせて、ぜひ公式 Twitter (@nijlkokubunken) のフォローと利用を宜しくお願い致します。（西村 慎太郎）



第28回人文機構シンポジウム「妖怪空間—でそうな場所」

去る6月11日（土）、東京都千代田区の有楽町朝日ホールにおいて、第28回人文機構シンポジウム「妖怪空間—でそうな場所」が開催されました。

人文機構シンポジウムは、人間文化研究機構の研究活動や成果を広く伝えるために行われてきたものです。今回は妖怪をテーマに、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館、そして国文学研究資料館の三機関の連携によって企画されました。

実行委員会ではさまざまな議論の結果、文学や民俗学研究の立場から妖怪のすみかや異界への出入り口に注目し、都市空間・家・身体という視点に立って「妖怪空間」を考察することで、妖怪が形成された歴史的背景や意義を探ることとなりました。シンポジウムのタイトル「妖怪空間—でそうな場所」は、実行委員会のおひとり、井上章一氏（国際日本文化研究センター教授）のご発案です。

シンポジウムは小松和彦氏（国際日本文化研究センター所長）の基調講演「妖怪の魅力はどこにあるのか？」から始まりました。小松氏は日本の妖怪文化の豊かさとその特徴、および「境界」やその向こうに広がる「異界」と妖怪空間との関連性を説かれました。

続いて、プレゼンテーションが3本行われました。初めに齋藤真麻理「妖怪たちの秘密基地—^{つくもがみ}付喪神の絵巻から—」は室町時代の絵巻を都市空間の視点から読み解き、「京七口」と通称される都の境界と妖怪空間との関連性などを指摘しました。また、常光徹氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）は「家屋敷と妖怪」と題し、屋根や破風、庭、蚊帳など、建築空間における境界と妖怪空間との交錯について論じられました。さらに安井真奈美氏（天理大学教授）「妖怪が狙う身体部位」は国際日本文化研究センターの「怪異・妖怪伝承データベース」のデータ分析から、人間にとって死角となる背中や身体の開口部が妖怪に狙われる部位であったことを指摘、日本人の身体観に言及されました。

最後は佐藤洋一郎氏（人間文化研究機構理事）の司会による全体討議が行われ、妖怪を生み出した歴史的背景や、妖怪空間を考える上で不可欠な「時間の境界」の問題、今後の妖怪研究の可能性などについて活発なディスカッションが展開されました。

この日の来聴者は約550名にのぼり、妖怪研究に対する関心の高さが感じられました。50代に次いで20代の方々が多く参加して下さり、10代から80代まで幅広い世代の方々が熱心に耳を傾けて下さったのは、大変嬉しいことでした。終始、手話通訳の方もついて下さいました。

なお、当日、ご参加頂けなかった方々からのご要望に応え、要旨集が機構のホームページから公開されました（<http://www.nihu.jp/ja/event/symposium/28>）。シンポジウムのダイジェストも You Tube で動画配信されています（<http://m.youtube.com/c/NihuJp>）。

末筆になりましたが、この企画がスタートしてから動画配信に至るまで、シンポジウムの実務全般は機構本部の菊池百里子特任助教が担当して下さい、常にきめ細やかなサポートを頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。

今後もこのような研究成果の社会還元を通して、人文学への関心がさらに高まることを期待したいと思います。

（齋藤真麻理）



ディスカッションの様子



会場の様子

パネル展示 「アーカイブズ・レスキューの活動記録」のご案内

2011年3月11日の東日本大震災では、多くの貴重な行政文書・歴史資料も被災しました。当館のアーカイブズ関係教職員は、これらのかけがえないアーカイブズを救出・修復し、継承するための活動を関連諸分野の研究者・専門家や自治体・ボランティア等と連携しながら現在まで継続して行っています。

本展示では、特に積極的に取り組んできた岩手県釜石市におけるアーカイブズのレスキュー活動を紹介します。釜石市役所は津波の被害を受けており、市役所に保管されていた行政文書の大部分が罹災しました。また、昨年9月の豪雨による鬼怒川堤防の決壊で大規模水害が発生した茨城県常総市でのレスキュー活動も合わせて展示します。常総市役所の行政文書も水害によって甚大な被害を受けています。

本展示では、活動の様子を示すパネルのほかレスキュー災害対策本部の記録など合計200点以上を出陳します。展示を通じて、地域の人びとが生きた証であるアーカイブズを救出し、未来へ伝えるための活動にふれていただければ幸いです。

(宮間 純一)

テ ー マ	アーカイブズ・レスキューの活動記録
会 期	2016年12月15日(木)・16日(金)及び12月19日(月)～22日(木)
時 間	午前10時～午後4時30分 ※入場は午後4時まで
会 場	国文学研究資料館2階の2室で期間を分けて展示します 大会議室(12月15・16日) オリエンテーション室(12月19～22日)
観 覧 料	無 料



野田武則釜石市長、当館青木睦准教授が一言書きした市旗



レスキュー活動参加者による寄せ書き

2016年度 子ども霞が関見学デー

2016(平成28)年7月26・27日の両日に「子ども霞が関見学デー」が開催され、親子連れで官庁街霞が関がにぎわいました。「子ども霞が関見学デー」は、1996(平成8)年度に始まった催し物で、子どもたちの社会体験、府省庁等の業務紹介などを目的に、毎年夏休みに実施されています。当館もこの行事に今年も参加しました。

本年度も、当館を含む人間文化研究機構の6機関は旧文部省庁舎6階第2講堂に出展し、4928人の来場者を迎えました。当館のブースでは、江戸時代の典籍2冊の原本、源氏物語絵巻のレプリカ本に直接ふれられるようにしたほか、館の活動や収蔵資料の紹介パネルを展示しました。また、百人一首や江戸時代の花火に関するクイズを作成し、配布しました。江戸時代に発刊された『錦百人一首あづま織』から作成した顔ハメパネルも設置し、自由に写真撮影できるようにしました。

子どもたちは、歴史的な典籍・資料にはじめて直接ふれ、驚いている様子でした。「本物なの?」とおそるおそる手を伸ばす親子、「この文字は読める!」「百人一首は知ってる!」と自慢げに言う子、「この紙は書道で使うのと同じだね」と紙に注目する子など反応はさまざまでしたが、2日間を通じて多くの親子に興味をもってもらえた実感できました。「どこにあるんですか?行ってみようかな」、「館に子どもが見学できる場所がありますか?」といったうれしい質問もありました。

イベントが行われている10時から16時の間、出展ブースは常に親子でいっぱいでした。こうした機会を通じて、子どもたちが少しでも歴史的な典籍・資料に関心をもってくれたのであれば、これよりうれしいことはありません。(宮間 純一)



出展ブースの様子



第2回 日本語の歴史的典籍国際研究集会 日本古典籍への挑戦～知の創造に向けて～

平成28年7月29日と30日の二日間、第二回目となる「日本語の歴史的典籍国際研究集会」が開催されました。昨年のテーマは「可能性としての日本古典籍」。歴史的典籍 NW 事業もまだまだ始まったばかりで手探りの状態でしたので、多様な可能性を示唆する発表が多かったと記憶しています。それから一年たった今年のテーマは「日本古典籍への挑戦 ～知の創造に向けて～」です。〈挑戦〉とありますように、単に可能性を示すだけではなく、内容も一歩踏み込んだ、具体的なものになっていたのではないのでしょうか。歴史的典籍 NW 事業の本格的な始動が実感できる研究集会であったと言えるでしょう。

それを象徴しているのが研究報告1「オーロラと古典籍」とパネル4「古典籍を活用する / 情報を活用する」でした。国立極地研究所の片岡龍峰氏による発表は、古典籍の研究とオーロラの研究という、全く接点がないように見える二つの研究が協力し合うことで、新しい融合的な研究を開きうることを見せてくれました。一方が一方に情報を提供するだけで終わるのではなく、それぞれに新しい知見がもたらされる、まさに知の創造といえるような達成があり、大変刺激的でした。

くずし字 OCR 技術についてのパネルは、研究方法そのものを協働によって創造していこうというものです。今後大量に蓄積される画像データを、研究に利活用するためのツール開発の最先端を垣間見ることが出来ました。例えば、林正治氏の研究は、現在は分散してしまっているのですが、かつて一堂に集められていた蔵書を仮想コレクションとして再構築してみせるというものです。これには、単にある一時期の蔵書を静的に見せるだけでなく、情報の持ち方を工夫すれば、蔵書形成や蔵書分散の動態をも再現する可能性があるのではないかと期待されます。また、北本朝展氏は、二つの板本の画像を直接比較して、その差異を取り出すというツールの開発について発表されました。これについても、二つだけではなく、複数のものを同時に比較することで、板本の刊・印・修に関する系統樹ができるのではないかと、思わず夢想してしまいました。このパネルのいずれの発表も、現在の達成に満足するのではなく、更に将来に対する大きな希望を抱かせてくれるものであったと思います。

研究報告2「書誌学から総合書物学へ」と3「人情本コーパスの表記情報アノテーション」は、以上の発表とは対照的に、従来行われてきた研究方法をしっかりとおさえた上で、更に新しい展開を試みようとするものでした。

順序は逆になりますが、上記の二点を総括するかのような発表が楊曉捷氏の基調講演「デジタル時代と古典研究 一画像資料のあり方を手がかりに」でした。早くからデジタル画像に注目し、それを使いこなしてきた楊氏の提言は、大変ユニークなものであり、なおかつ説得力のあるものです。

その良い例は、くずし字を運筆から学習しようという方法でしょう。字母とくずし字とを単に対応させて見せるのではなく、筆の動きを動的に再現してみせることで、よりくずし字のありかたが理解しやすくなるのがよく分かりました。

文学研究の基本は作品を丁寧に読み込むことにあります。そこで最も重要なことは、作者の意図なのです。つまり、作者の個性を明らかにすることが求められているわけです。しかし、作品は誰かに読まれなければ意味がありません。また、月次ということばがあるように、必ずしも個性を発揮することを求められているわけでもないのです。合山林太郎氏を代表とする「日本漢文学研究を“つなぐ” 一通史的分析・国際発信・社会連携」のパネル2は、漢詩文においてそのことを考えてみるというもの。漢詩文の読まれる場、あるいは読者の問題など、静的な作品論に終わらない、動的なものを明らかにしようとする大変意欲的なものでした。

動的と言え、パネル1も同様でしょう。中国から日本へ、日本から中国へ。書物と情報の移動は国境を越えて行われていました。そのインフラは、漢字(漢文)によって整備されていたわけです。個人的には、フロアからの「なぜ中国では、舌診のための図に色を付けないのか」という質問に対する梁嶸氏の回答を大変興味深く聞きました。それは「色を付けると、表面的な現象にとらわれて、本質が見えなくなるからだ」というもの。いろいろな意味で日中の文化の本質的な違いを象徴するような質疑応答だと感じました。

パネル3「中世の異界―内と外―」も、まさに現実世界と異界とを動的に行き来することをテーマにしたもの。文学の世界では、言葉の壁なしに異界との行き来が出来るという点に改めて気付かされました。

全体を通して、新しいことを進めるには夢を語ることが重要だということを再認識しました。こんなこといいな、できたらいいなということを率直に語り合うことで、研究やツールは進歩するのではないのでしょうか。今回の研究集会は、そういう夢をたくさん見せてくれたように思います。(入口 敦志)



第40回国際日本文学研究集会プログラム

第40回 国際日本文学研究集会

主催：国文学研究資料館

後援：総合研究大学院大学

平成28年11月19日(土)

受付開始	12:00~
総合司会 入口 敦志 (国文学研究資料館准教授)	
開会挨拶 今西 祐一郎 (国文学研究資料館長)	13:00~13:10
【第1セッション】 司会 海野 圭介 (国文学研究資料館准教授)	
研究発表	
[1] 「破鏡」は「半鏡」に非ず—源光行『百詠和歌』第一「分暉度鵲鏡」注を中心として— 白 雲飛 (大阪府立大学客員研究員)	13:10~13:40
[2] 能因における貫之の影響—伝統と変奏— 巖 教欽 (東京大学大学院博士課程)	13:40~14:10
[3] 西鶴浮世草子における物語の内容別にみた文章の特徴について —数量的観点からみた好色物、武家物、町人物、雑話物の文章の違い— 上阪 彩香 (同志社大学特別任用助教)	14:10~14:40
休憩 (15分)	14:40~14:55
【第2セッション】 司会 相田 満 (国文学研究資料館准教授)	
研究発表	
[4] 中日僧伝文学に表れた「狂僧」に関する一考察 田 云明 (唐山学院専任講師)	14:55~15:25
[5] 中文学交流における「夢記」—明恵『夢記』の執筆契機をめぐって— 趙 季玉 (早稲田大学リサーチフェロー、北京外国語大学博士課程)	15:25~15:55
休憩 (10分)	15:55~16:05
【ショートセッション】 司会 DAVIN Didier (国文学研究資料館准教授)	
① 『日本霊異記』中巻第十縁における脚色と改変—「自土」の視点 孫 世偉 (早稲田大学リサーチフェロー、カリフォルニア大学 ロサンゼルス校 (UCLA) 博士後期課程)	16:05~16:20
② 志賀直哉文学における「リズム」の概念と現象学芸論の可能性 ZABEREZHNAIA Olga (モスクワ大学大学院修了)	16:20~16:35
③ 日本語教材となった近代日本文学—講談速記を中心に— ALBEKER András Zsigmond (京都大学非常勤講師)	16:35~16:50
休憩 (5分)	16:50~16:55
【ショートセッション】 司会 河野 至恩 (上智大学准教授)	
④ 多和田葉子『献灯使』論—震災後風景の文学表象 金 昇淵 (立命館大学大学院博士前期課程)	16:55~17:10
⑤ 恋愛と女同士の友情 SANGA Luciana (早稲田大学研究員、スタンフォード大学博士課程)	17:10~17:25
事務連絡・会場移動	17:30~
レセプション	17:45~18:45

平成28年11月20日(日)

受付開始 9:30~

総合司会 サイトウ マオリ 齋藤 真麻理 (国文学研究資料館教授)

【第3セッション】 司会 ナカムラ トモエ 中村 ともえ (静岡大学准教授)

研究発表

- [6] 子規漢詩に見る女性観
カ ミナ 何 美娜 (広島大学特別研究員) 10:30~11:00
- [7] 『山の音』における能—諸外国語の翻訳から検討する—
モリシタ リョウコ 森下 涼子 (総合研究大学院大学博士後期課程) 11:00~11:30
- [8] 永井荷風が描いたサウンドスケープ—昭和初期の作品における音の図象性—
フォッラコ ガラ マリア FOLLACO Gala Maria (ナポリ東洋大学研究員) 11:30~12:00

休憩 (120分) 昼食・ポスターセッション 12:00~14:00

【特別講演】 司会 イマニシ ユウイチロウ 今西 祐一郎 (国文学研究資料館長)

特別講演1 「俳諧に現れた日常の美学とその特性
—日韓の詩歌比較の観点から—」 14:00~15:05

ユ オクヒ 兪 玉姫 (啓明大学校教授)

休憩 (15分) 15:05~15:20

特別講演2 「知の形態としての日本古典文学」

クリステフ ツベタナ KRISTEVA Tzvetana (国際基督教大学教授) 15:20~16:25

総括 16:25~16:35

【ポスターセッション】

- シアトル美術館蔵『源氏絵巻物』についての諸検討—初期の土佐派源氏絵巻—
キューン ミッシェル KUHN Michelle (名古屋大学特任講師)
- 平安文学における「観相」受容の可能性—『源氏物語』と『浜松中納言物語』を中心に—
チャン ベイホア 張 培華 (国文学研究資料館博士研究員)
- 佐久間象山「東洋道德、西洋芸術」にみる「芸術」について
エザキ キミコ 江崎 公子 (元国立音楽大学准教授)
- 『西鶴諸国はなし』巻三の六「八畳敷の蓮の葉」における策彦和尚の落涙についての考察
ミスカミ ユウスケ 水上 雄亮 (武蔵高等学校中学校専任教諭)
- 藤原公任と薫物の伝承—物語古注釈書と薫物秘伝書が伝える王朝の貴顕の香り—
タナカ ケイコ 田中 圭子 (広島女学院大学客員研究員)
- 遠藤周作とフランツ・ファノン
カミヤ ミツノブ 神谷 光信 (関東学院大学客員研究員)
- 国宝「銅造薬師如来坐像」光背銘再攷
ライ エンコウ 頼 衍宏 (静宜大学副教授)

総合研究大学院大学の近況

○平成29年4月入学 入学者募集

平成29年度の入学者を、下記のとおり募集します。

募集人数：大学院博士後期課程 3名

取得できる学位：博士（文学）

願書受付期間：平成28年11月25日（金）～12月1日（木）

詳しくは、webサイトをご覧ください。

<http://www.nijl.ac.jp/~kyodo/soken.files/enter/outline.html>

○平成28年度学位授与

平成28年度の学位（博士号）が以下のとおり授与されました。

条 汐里（課程博士）「中・近世語り物の形成と享受に関する研究」

○学会報告

条 汐里（日本文学研究専攻 博士後期課程）

2016年6月25・26日に平成28年度説話文学学会大会が開催され、研究発表の機会をいただきました。説話文学学会は、国文学研究を志す者にとっての登竜門の一つです。私の研究発表は『大橋の中将』の成立と流布」という題目で、お伽草子『大橋の中将』の諸本に関する基礎的な分析を通して法華経との関係に注目し、日蓮宗における本作の縁起化、またそれらと家伝との関連について述べたものです。

お伽草子とは、室町時代から江戸時代にかけて流行した短編の読み物で、「奈良絵本」と呼ばれる豪華な絵巻、絵入りの草紙としても親しまれました。古浄瑠璃とは、人形操りを伴う語り物芸能のことで、その台本は正本として文字化され、やがて読み物としても人気を博しました。

『大橋の中将』は、梶原景時の讒言によって鎌倉で幽閉された父・大橋の中将の行方を尋ねるため、息子の「まに王」が鎌倉へと下向する物語です。物語の本文はお伽草子、古浄瑠璃双方のかたちで伝わるほか、日蓮が南条時允に宛てた建治2年（1276）閏3月24日の消息『南条殿御返事』と、長享2年（1488）頃成立の『浪合記』という書物に、類話が確認されています。

これら様々なテキストを整理分類すると、法華経の引用が多いお伽草子系 A 系の本文と、語り物特有の文体的特徴をもつ古浄瑠璃系 B 系の本文の、二つの系統にわけることができます。A 系に属するテキストは、上巻のみの本や、下巻の一部分が存する本など、いずれも完全な形では残っていません。そのような中で国文学研究資料館が所蔵する20枚の『大橋の中将』は、欠けている箇所こそ多いものの、不完全なテキスト同士をつなぐ貴重な内容となっています。書型から近世初期に制作された横型の奈良絵本であることが明らかな豪華本です。

現存するテキストをつなぎ合わせると、A 系は B 系に比べ、法華経の文句が多数引用され、『南条殿御返事』と共通する表現もみえます。つまり A 系は B 系よりも古態をとどめていると思われます。学会発表の一週間前に、国文学研究資料館の先生方、院生の前で下発表をしたところ、A 系の新出資料があるとの情報を得て、継ぎ接ぎであった A 系本文を、大幅に復元することもできました。

学会当日は A 系の『大橋の中将』の古態性や日蓮宗の文芸としての意義について報告し、さまざまなご意見を頂戴しました。日本文学研究専攻の先生方のご指導のお陰をもち、実りある学会発表となりました。



『大橋の中将』（国文学研究資料館蔵、請求記号：ユ 3-52-1～20）

11月						
日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

12月						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

1月						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

- 開館：9：30～18：00 ●請求受付：9：30～12：00, 13：00～17：00 ●複写受付：9：30～16：00
ただし、土曜開館日は、
●開館：9：30～17：00 ●請求受付：9：30～12：00, 13：00～16：00 ●複写受付：9：30～16：00

大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

学部・大学院で行っているゼミや講義を国文学研究資料館で行いませんか。
豊富な所蔵資料を手に取りながら、ゼミ等を行うことができます。
ぜひご利用ください。

◆お申込みはEメールでの受付です。

詳細は当館WEBページをご覧ください。

<http://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/univ/shien.html>



表紙絵資料紹介

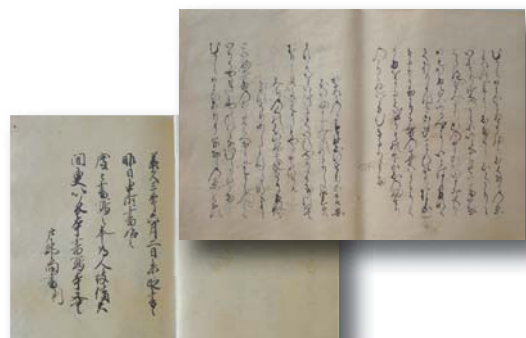
伊勢物語（承久三年本）

鎌倉時代以降、伊勢物語は定家本（藤原定家が書写に参与した本）で読まれることが多くなる。八十年の生涯のなかで、定家はすくなくとも七回伊勢物語を書写したと推定される（福井貞助氏『東海大学蔵桃園文庫影印叢書伊勢物語』解説）。そのなかで天福本や武田本と呼ばれる本は証本として重みを増していく。

一方、やや趣を異にするのが承久三年本である。いくつかの本の奥書などに承久三年（1221）（定家六十歳）の書写が記録されているが、定家自筆本は伝わっておらず、また、その流れを汲む本も数が少ない。

このような状況のなかで承久三年本の優本として昭和五十四年（1979）に田中清市氏が翻刻解題したのが表紙に紹介する鉄心斎文庫本である（『伊勢物語（鉄心斎文庫本）』・古典文庫397）。さらに今年二月には加藤洋介氏『伊勢物語校異集成』において当該本に関する最新の研究成果が示され、研究の進展が著しい。

奥書によれば、定家は承久三年六月二日未時、前の日に着手した物語書写を終えた。世は承久の乱の最中であつた。五月十五日後鳥羽院は北条義時追討の院宣を発するが、翌六月十五日には鎌倉方が都を占領し、都方の敗北が決定的となる。前年に後鳥羽院の院勘を蒙った定家は、その争乱のなかでどのように過ごしていたのか。この期間の明月記は残っていないという。承久三年本伊勢物語は乱当時の定家の動向を伝える歴史資料としての性格も持っている。鉄心斎文庫にはこの承久三年の奥書を有する本が二点備わる。（12.3×9.0cm）（藤島 綾）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

発行日 平成28（2016）年10月14日
編集 国文学研究資料館広報出版室
印刷所 睦美マイクロ株式会社
©人間文化研究機構国文学研究資料館